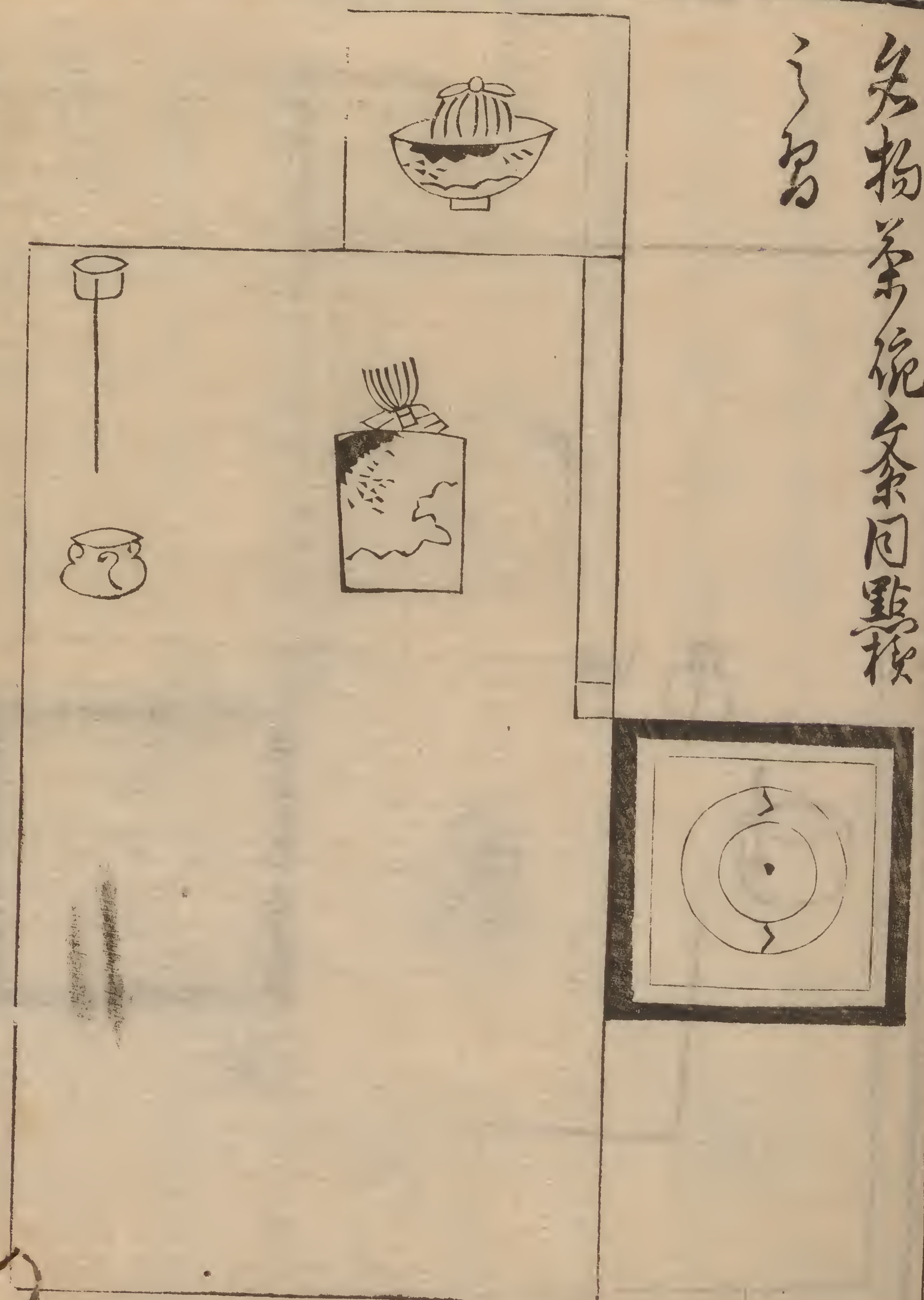
茶湯綱目　四

469

茶之湯綱目　四之巻目録

名物茶碗楽同點様之習
栖楼棚棗之数併貧茶碗之習
袋棚茶杓筒荘餝瓶水指解蓋置習
炉菓子真之備洗桶茶入垣桶茶碗
茶螺穴蓋置
名水茶之湯
巾子盆并茶杓合林寺茶通并茶杓絨　衣文
帛の習
麦風爐釜蓋の二ツ習

名物茶碗文茶同點様之習



茶入使氣取之習

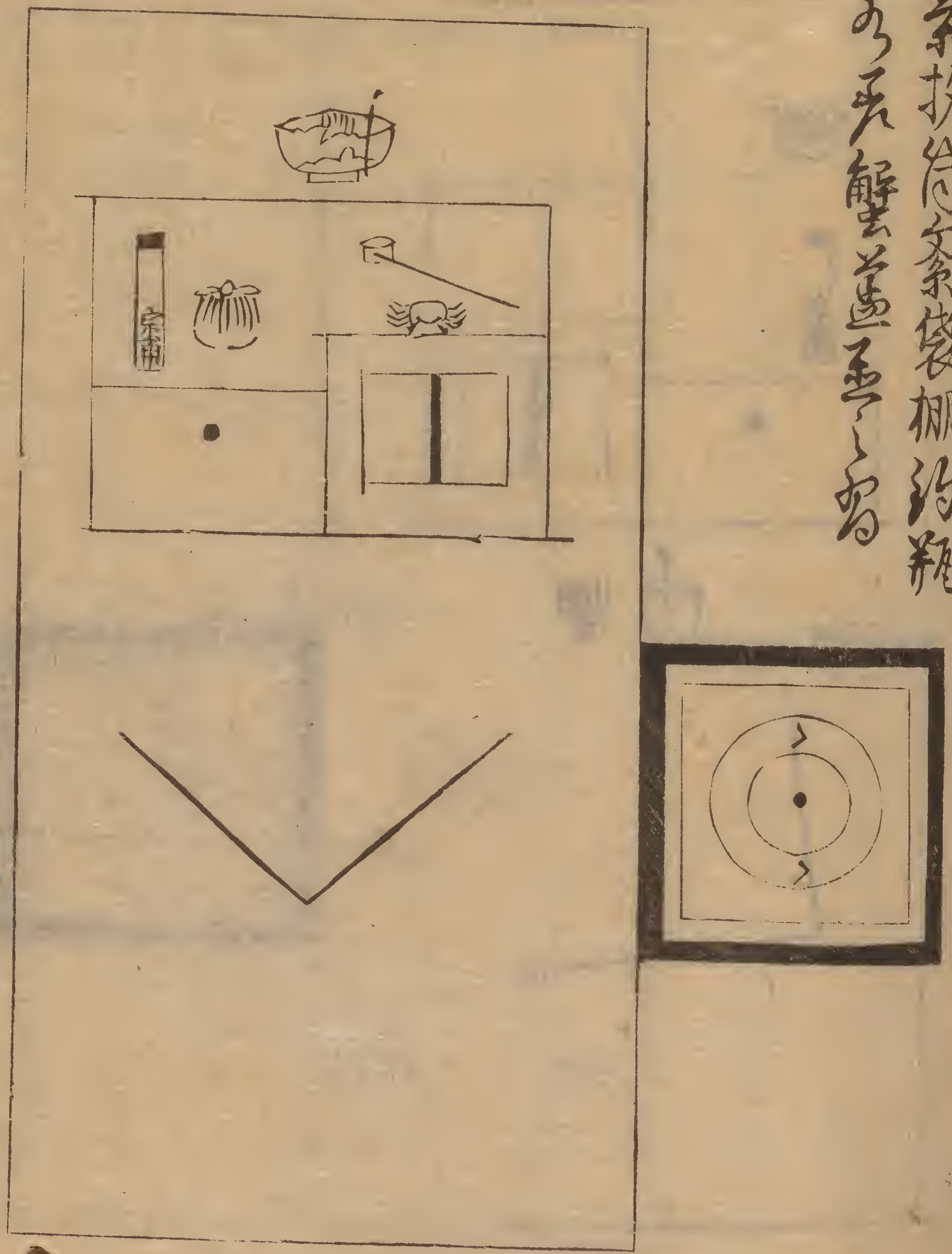
論議點之習

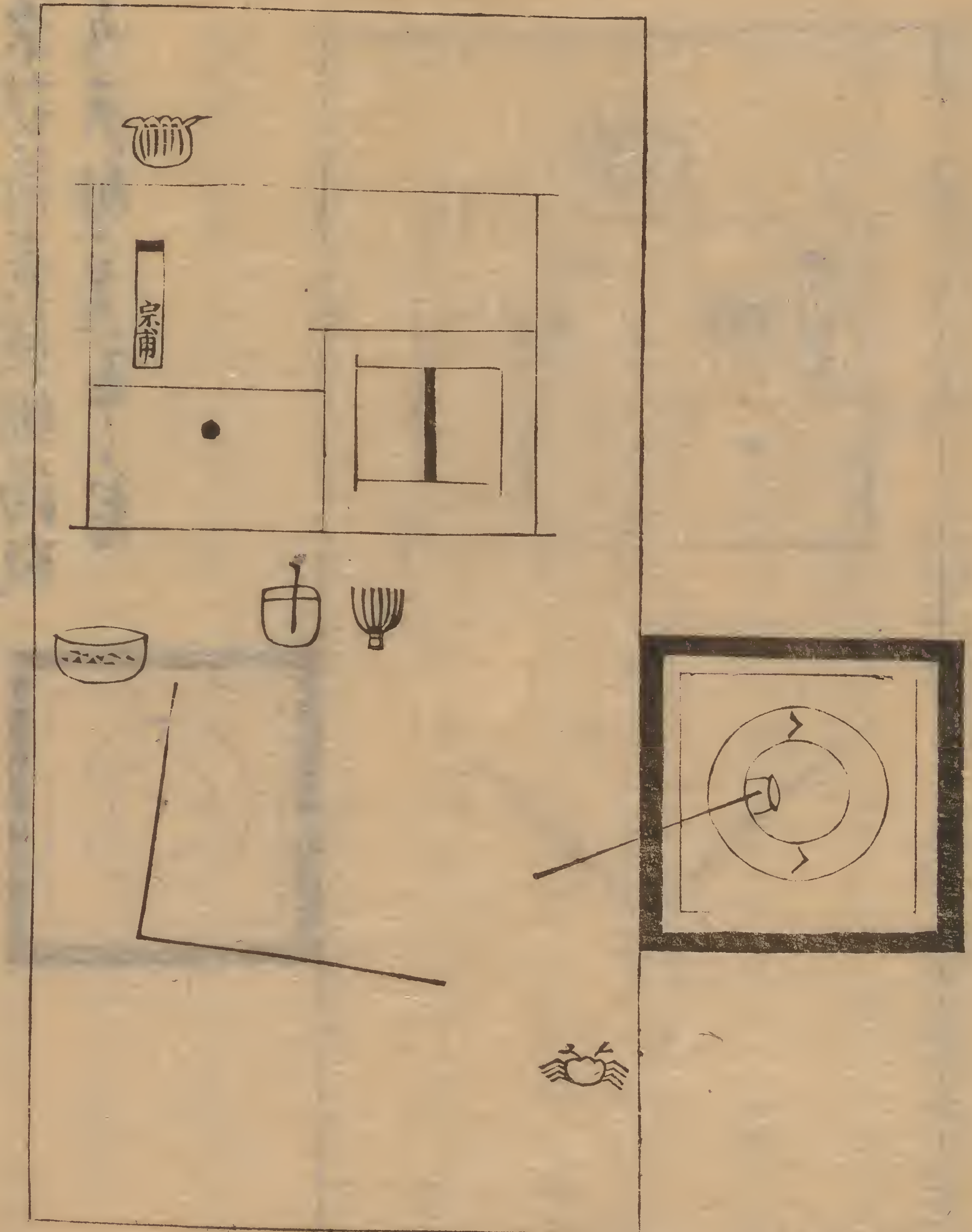
一 先ヅ茶碗をいつものごとく茶一ツ見て後に附に
前のごとく茶入中へ入角棚より茶を
此時もの蓋に茶杓をかけおき
茶巾をいつものごとく茶碗を下し
手に取替て持へ下し待ちかたを
ひろげ置し中より茶入をとりおき
それより常にかへる事なし手前も同じて
茶のゝ湯圓ありまつてとさしくと同
茶碗をとり直し湯をくみてすゝぐ時
亭の田に於て結(ケツ)構(カウ)なる御茶入御茶碗箱

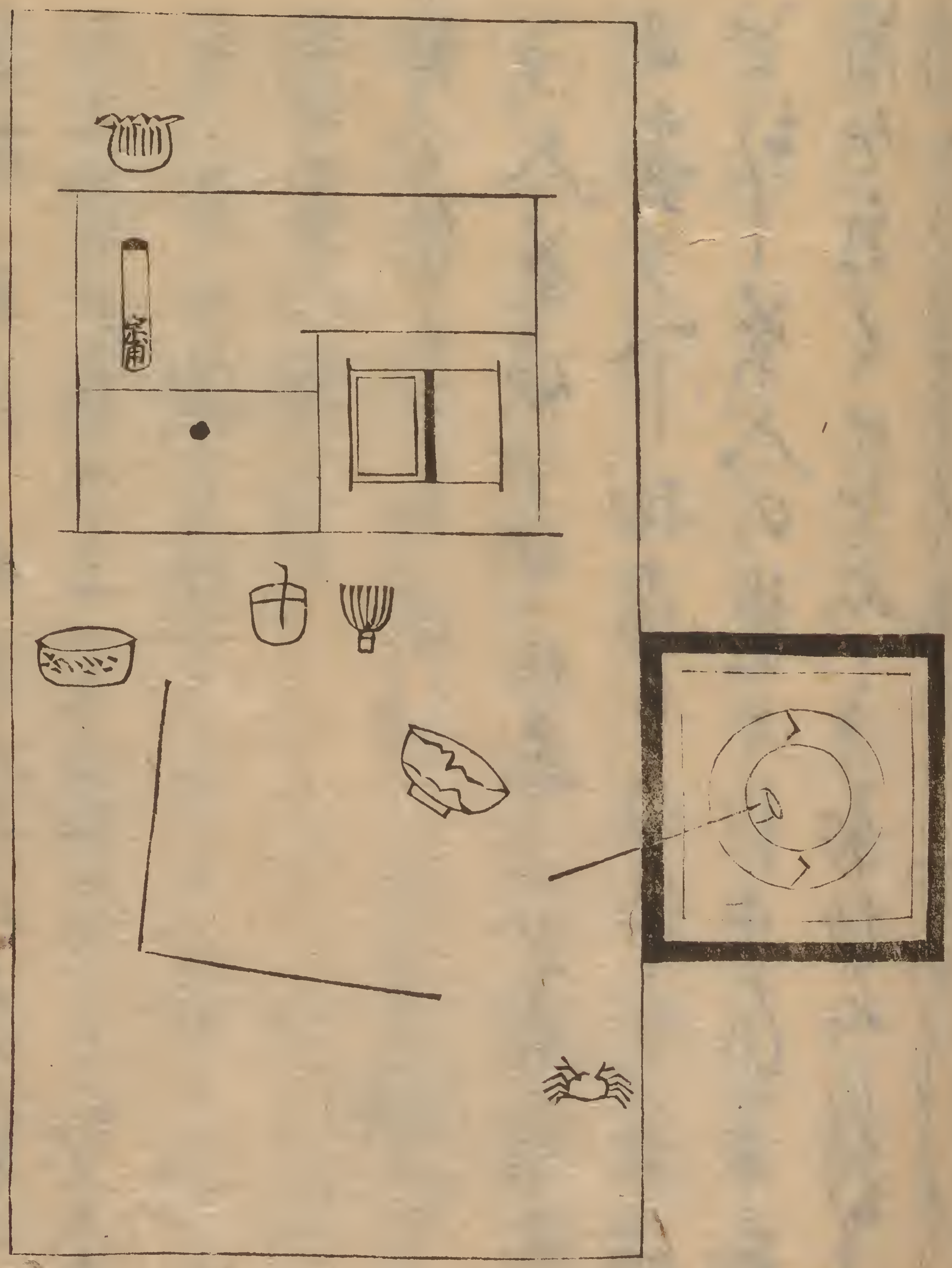
見しいこしが取りつても閣(か)がものごとく茶碗
をつけ仕候御茶碗をよくおさめ置くこと
亭主もそれを捌(サウ)直(コツ)しあいさつ又湯すゝぎ
茶釜まで差して茶巾あててよ
喰ふ湯の茶をとり出し置しおき又
附(ジ)宜(ギ)をと云ふ上つ所より見て見人亭主に
茶入又を附し蓋しめ茶巾をとりおき
とりて蓋の茶盞して湯のごとく茶釜
中の下ろしおきて茶入とりてあいさつ
さてさ常のごとくあし…

茶碗に多しむつかしき仕志乃入子
なり是非口傳あるへし

茶杓台子茶袋棚釣瓶
水兵盤蓋置香合




宗甫

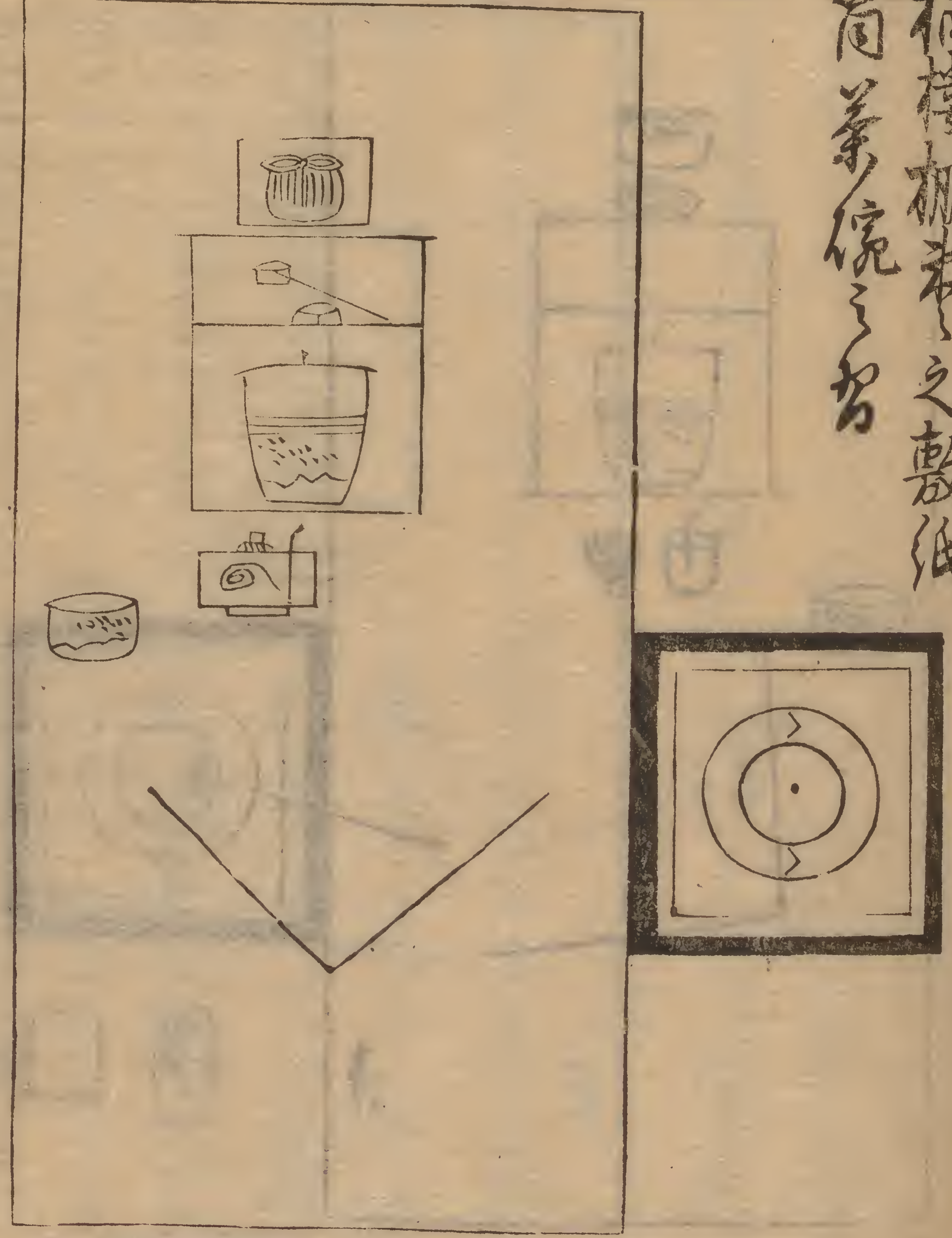

宗甫

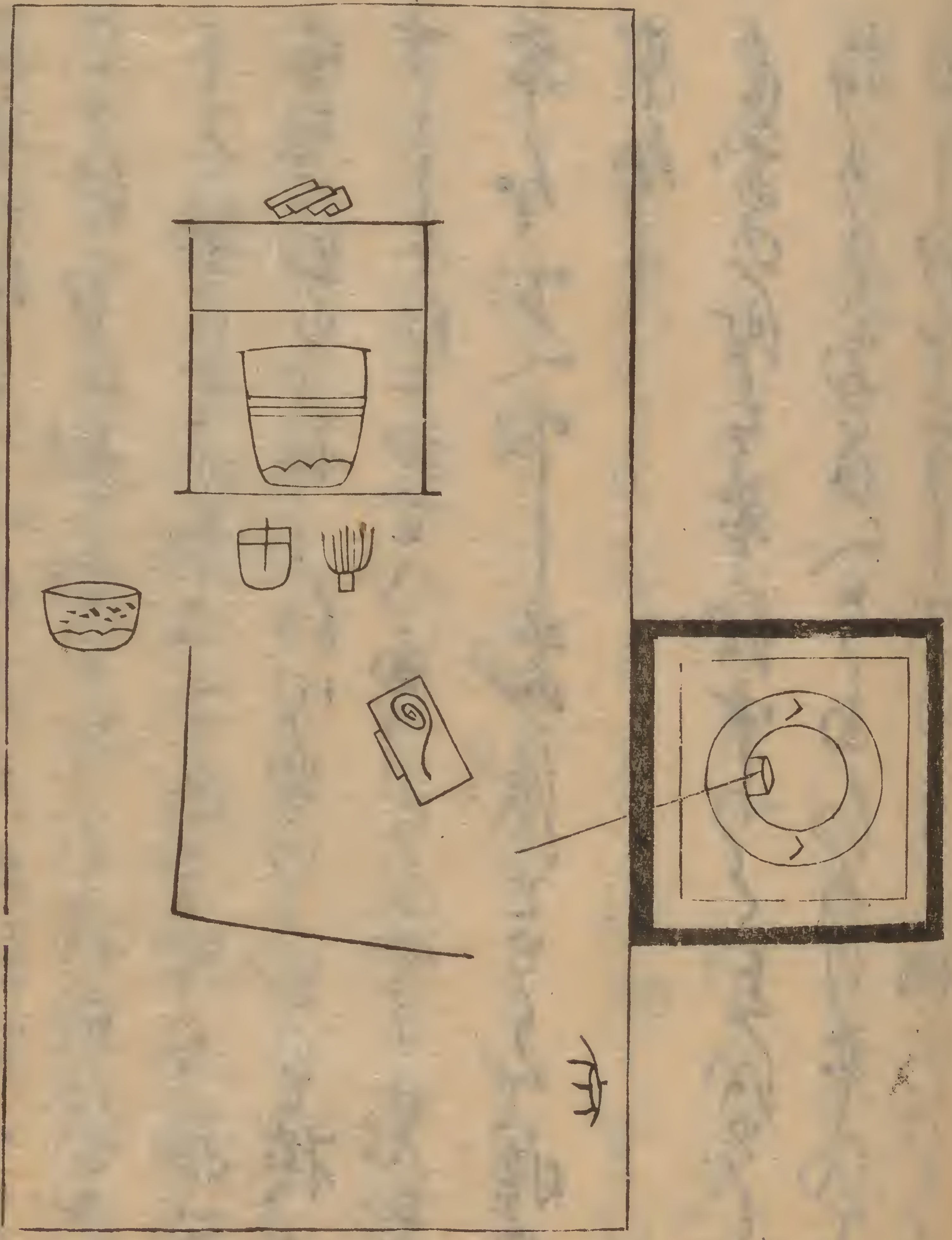
一袋棚條多くあれと袋乃らちを書棚
と云袋乃内へ台子の蓋中おくをも入る
又蓋に棚にはしくもこしやく
茶器並乃場なり
一出しく袋の戸を明ておしひらき右の脇に置
茶入茶碗を中の志きゐに置也
又並へし扱居をかひして茶碗
とおし茶入の袋をは巾に入茶扱
筒を取くふたをあけ茶杓を取おし
筒あとのことし志めてくおのしとく

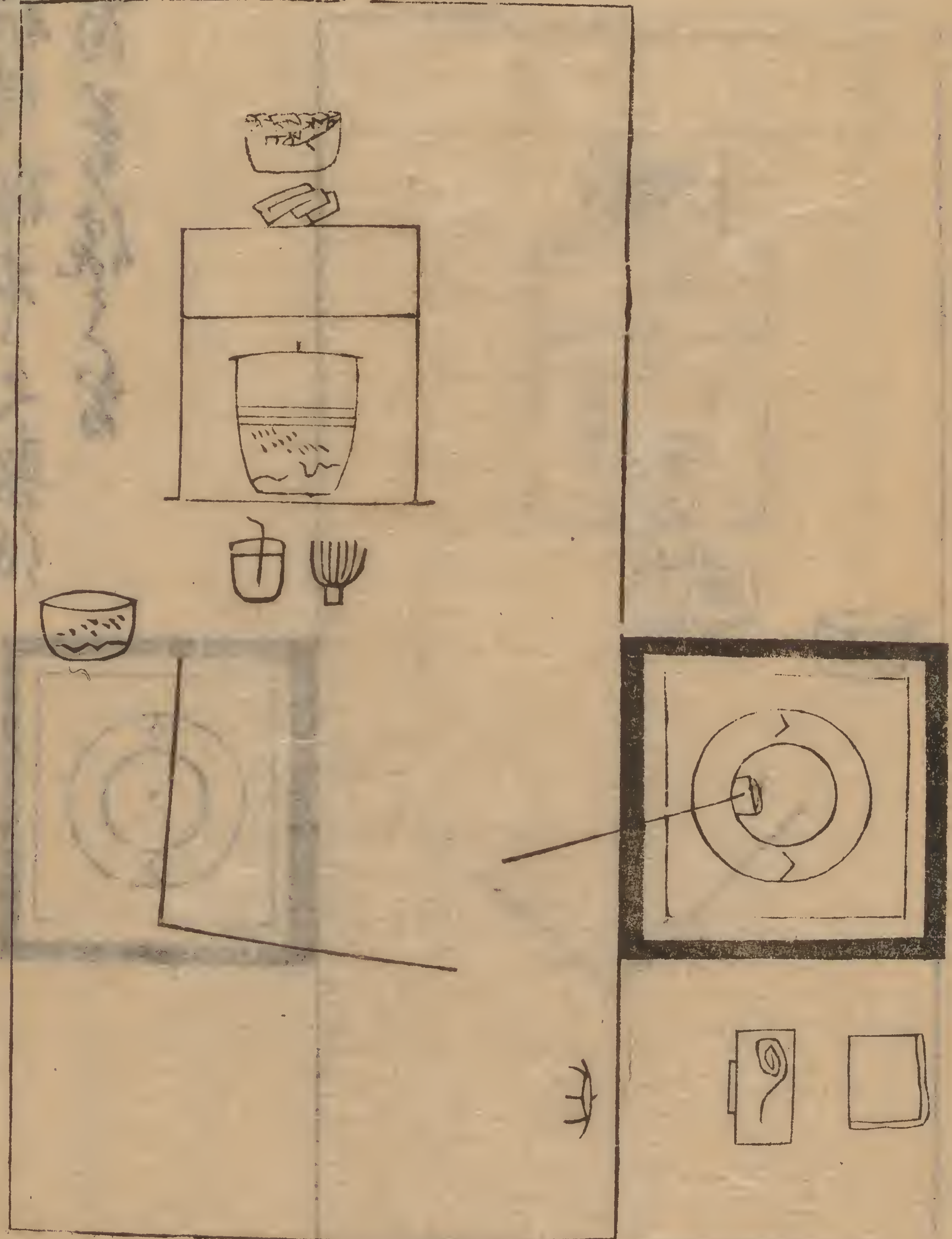
たゝみへ上ヶ置茶筅よこへ茶巾に茶
杓茶器を取おし蓋のとくし横に
置候ひて右脇に常乃ことくのとし
一湯瓶乃蓋の取様ハ向の方へ上ゟ
うちかけく茶碗へ七八分ほと汲出しあの
出すゝ扇にて取中のくぼみに取直し
斤くのとへすゝぬ風し取候
一大事乃口傳なり
一湯瓶に茶の事乃扱めあめてさしあ
なりとよりうかゝひきまて寸付

なりともよくきめ乃きしひの出しうらば
書翰ともならなりとも
一 茶杓は先出し其後に箇も可ん
けれとも茶入ば来りに書き子細も
茶杓と書翰の外なり文箱ハ常に
乃茶杓の次にはあるより常に杂
て出すべし是貴人の為也
一 客振舞のときハ茶杓と箇を今て
常にのせてかへすべし亭主取付ハ
手をかけよせて常芸にのせるに
其みかりは清むべし
箇のまゝ箇にめし物置
差しとかさねて客に見すべし
物親にも拍振舞ハ手にまよ
るけく松板壱やうくらんとする

栖樓棚ニテ之敷紙
簡茶ノ院之図





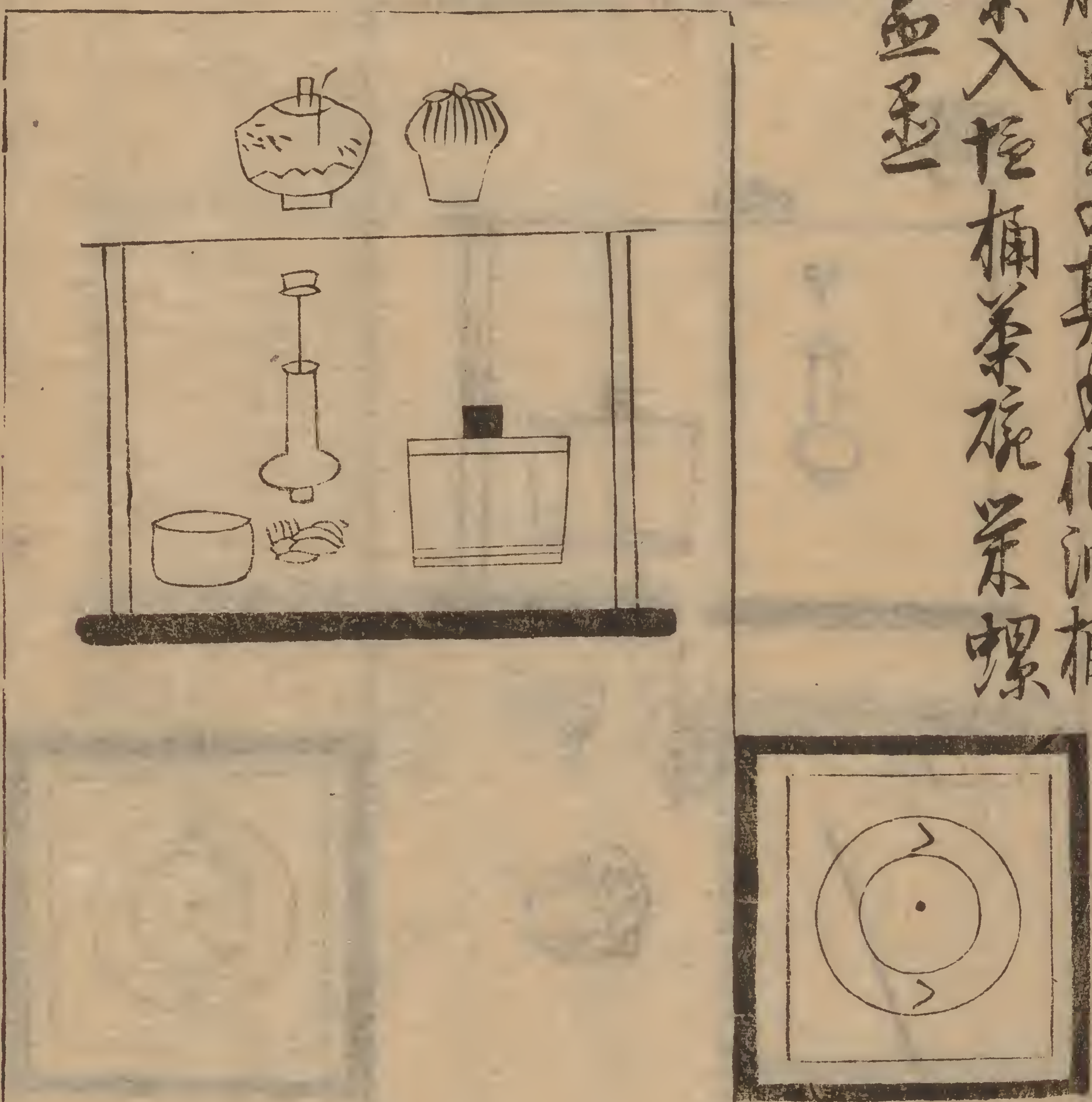


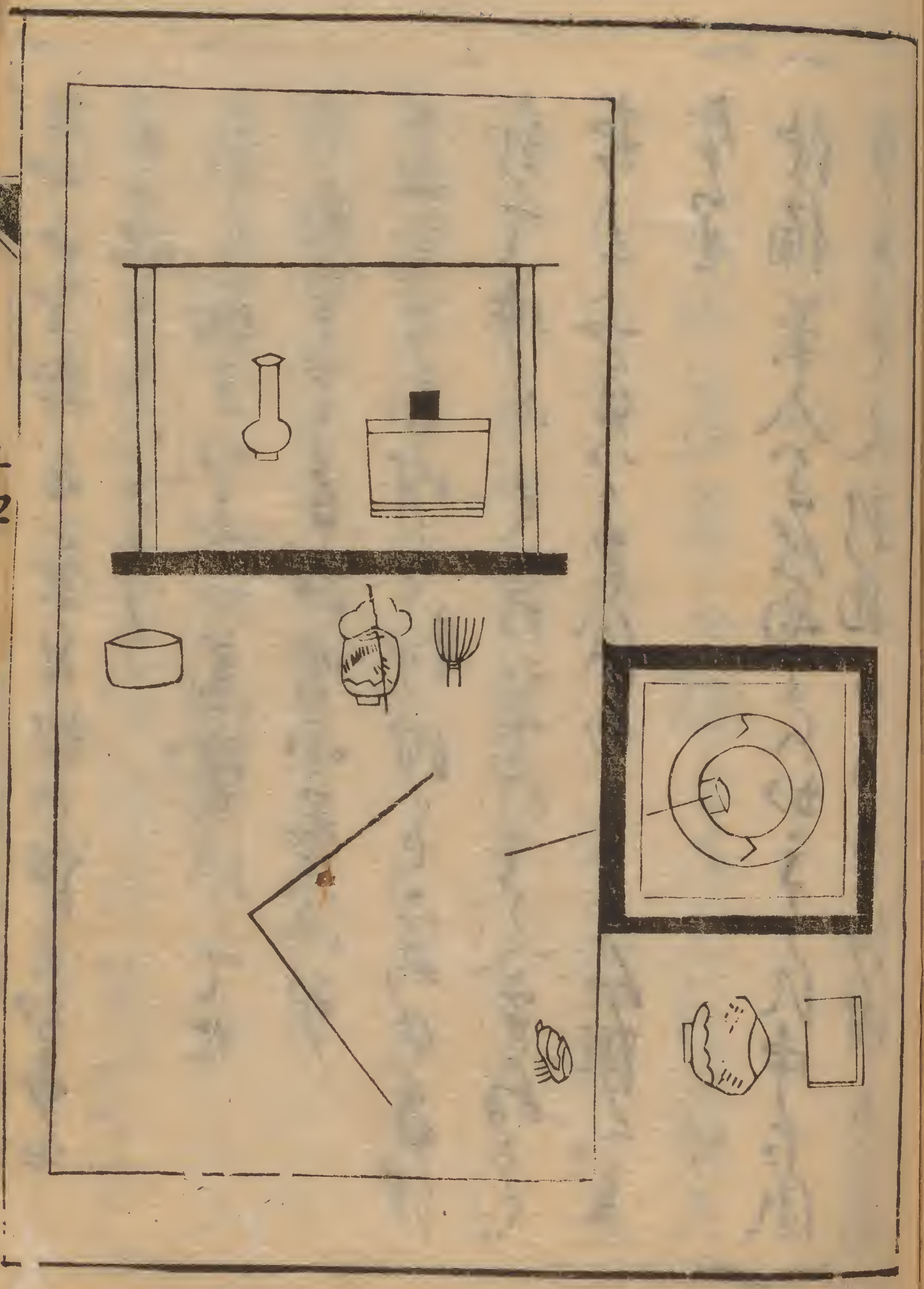
一奉書紙といふハむかし唐乃時代物ハ小ぶね
をうけ下め奉書を折りく折目ハ出へ
しく焙炉の胴二寸ある時ハ損又
出て出そあと向ふ出て上を横三
すじして壁弐寸八分とを巡し先おて
帯を下へ下し引紙をとりて焙中
を合し
一上ゐの時ハ帯紙中ふくよく紙を
折りく出手へうあいらけ帯紙れ
出し紙を帯し壁のく棚へはゐらる

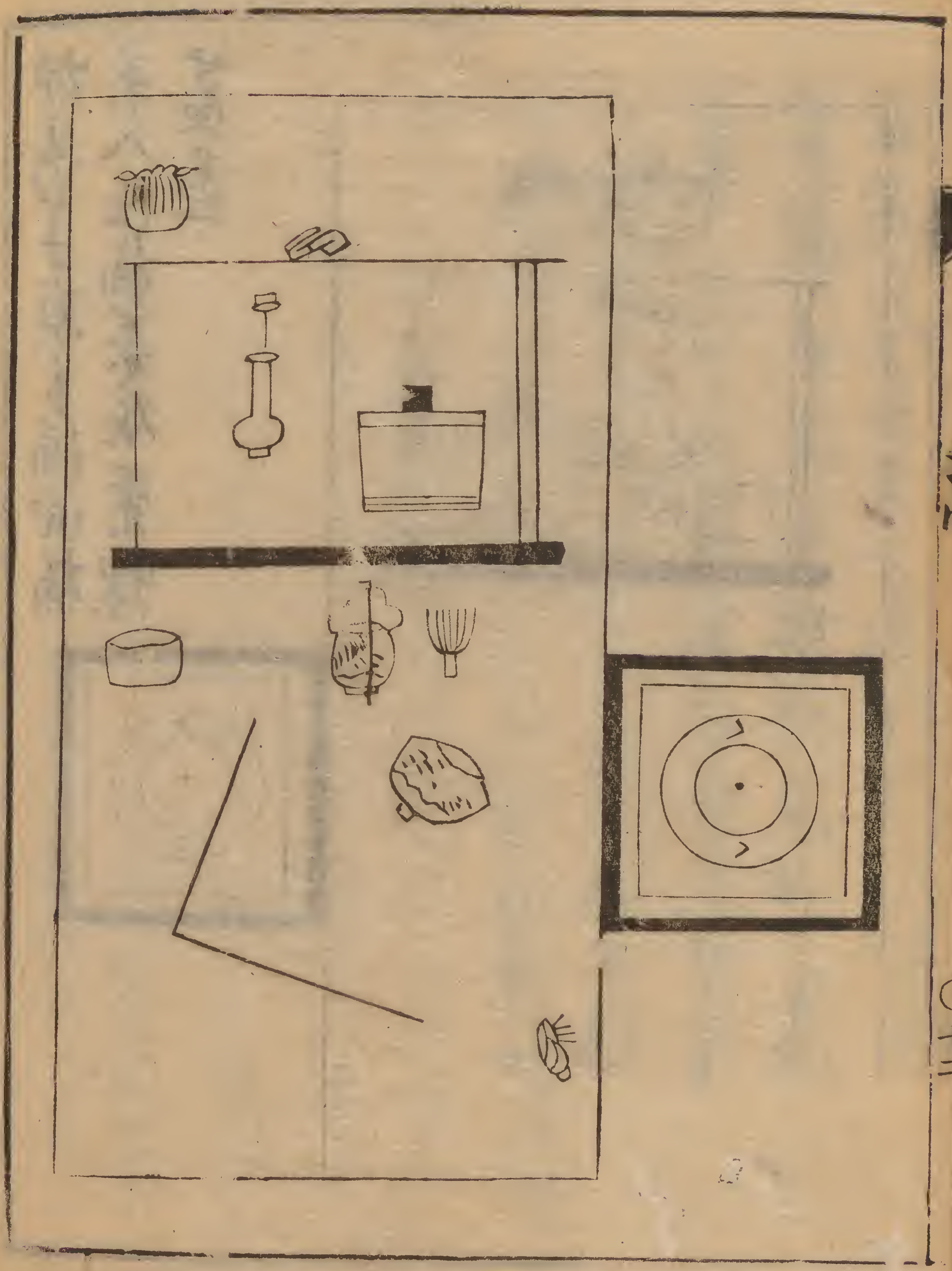
なほ是をわハ帯の帯しよあり
一筒茶焙ハ肉へ入るよ茶巾にそつとし
そのうへめ茶谷紙をふつきのめ入る
一筒茶焙のよあるハ茶焙めくうに
先そこを巾ひぬ綿めうらかけて
出る是紙巾にへし其の後下めを
て茶巾を中へいるる帯のくして
くしへし又湿めも茶巾をうく
志ね是中ふく四つめ折て弐つ
折中ふく吊るる此に志てしきを入よ

右茶入を置へしなり
一 炉棚ニハ先茶杓を右切して左に
置し其次第は先其茶碗を置
茶巾は風炉くらいの節にあれ
やうくもはつくくしハ中をする

炉臺子真ノ備 沈桶
茶入 柁桶 茶碗 茶螺
蓋置







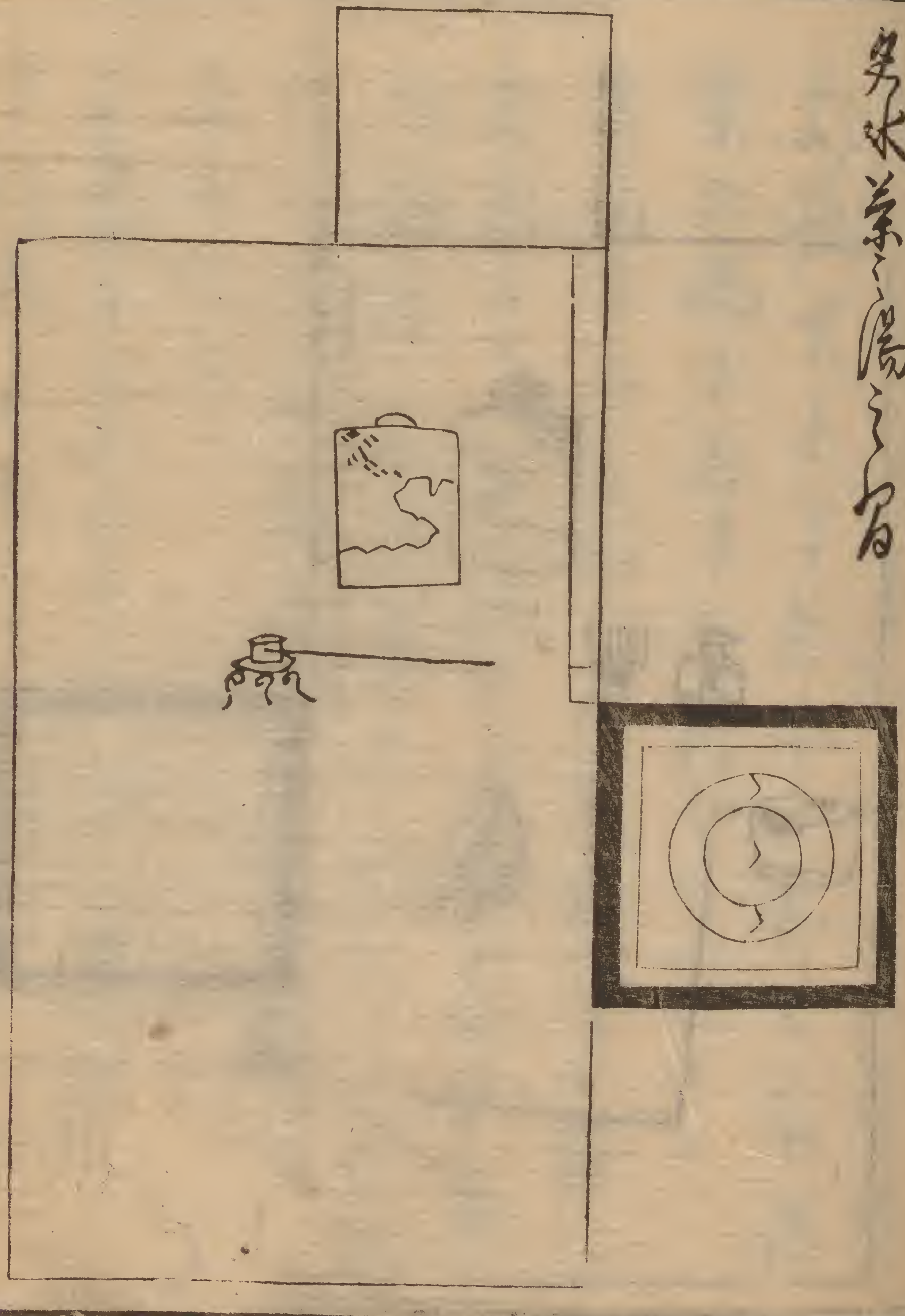
一菓子を炉の奈台附ハ炉菓子のやと
云荘りくのごとし
一真の手桶といふハ黒塗にて右まで
有物なれバ又ハ塗小盆ばおくこと
蓋を取る所附て御附もあるのちは
取て中あくれを一斤ぐらゐへまゐらせ
盛りて蓋ハ上ばあくるとんぬへき
なり
一唐桶茶入ハ広き物まんかさバ中古流
戸あらし又新物ありとも御附も茶

扨も清めのとりくみ茶釜とも同然
あらすべくおくべきなり
一さらいの蓋置ハ棚ハ有ものは角乃
方をそへしておくべし丸物ハさらいに
海の尻に付て角をそへしておい
あつかうゆへさらすの蓋附くのごとし
釜の蓋附て口の方ばそへして置て
置したなくして釜のふたの上より
あしきゆへなり水指桶の茶碗に
茶筒茶碗も同じなりとこうも茶

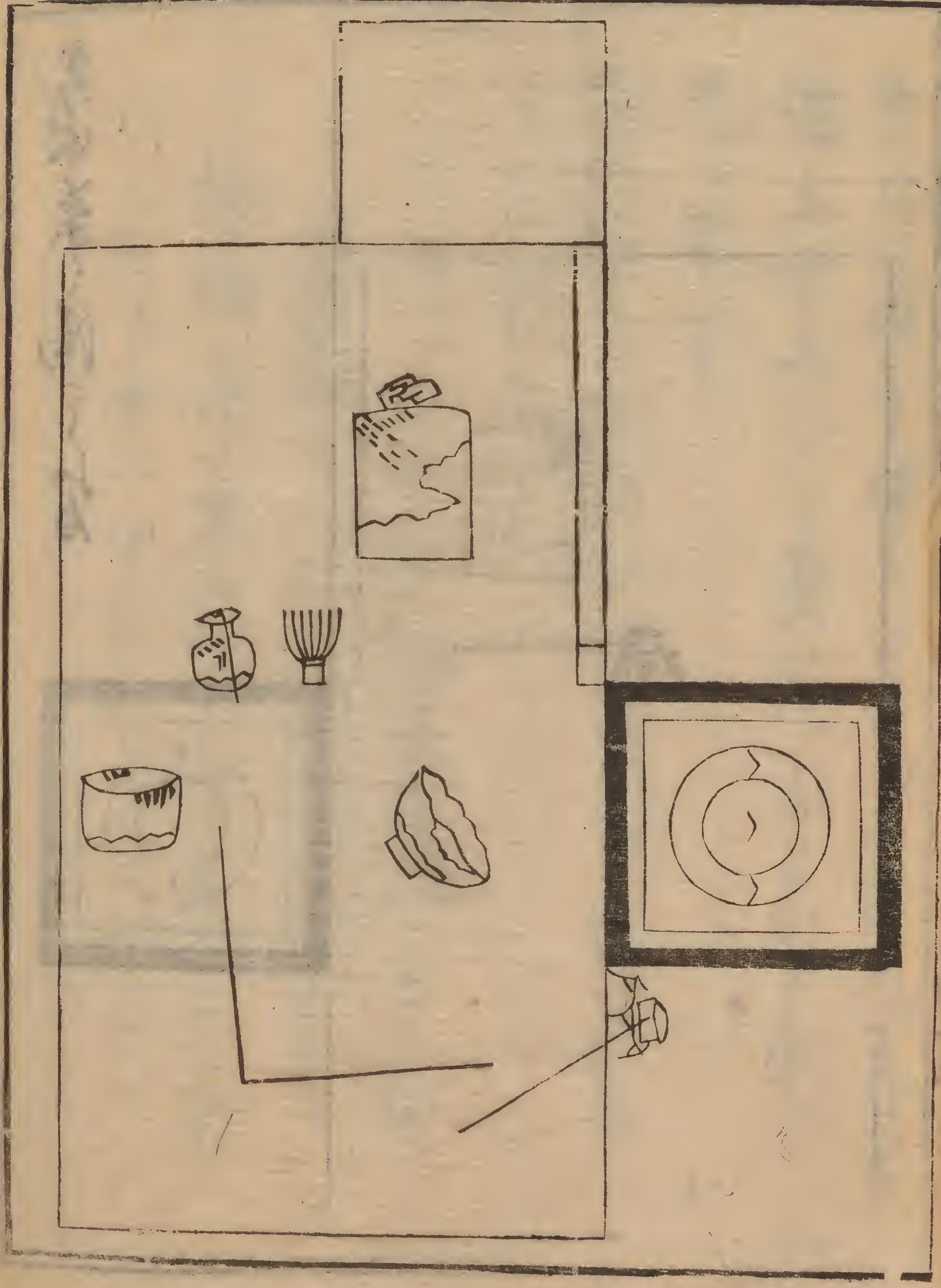
中海く河とも中ニ置先ニ中ひ而あと
備に中へし茶碗をも左に置ニ
入れ置
大のかゝとあ中へうつす事なし置く
と心得よし

つるつるや油桶の茶入をも揃へ
茶筋をうしろへつるまかくされ
炬桶筒茶ののこやすめふるへて
あとの一口をのむとのむへし

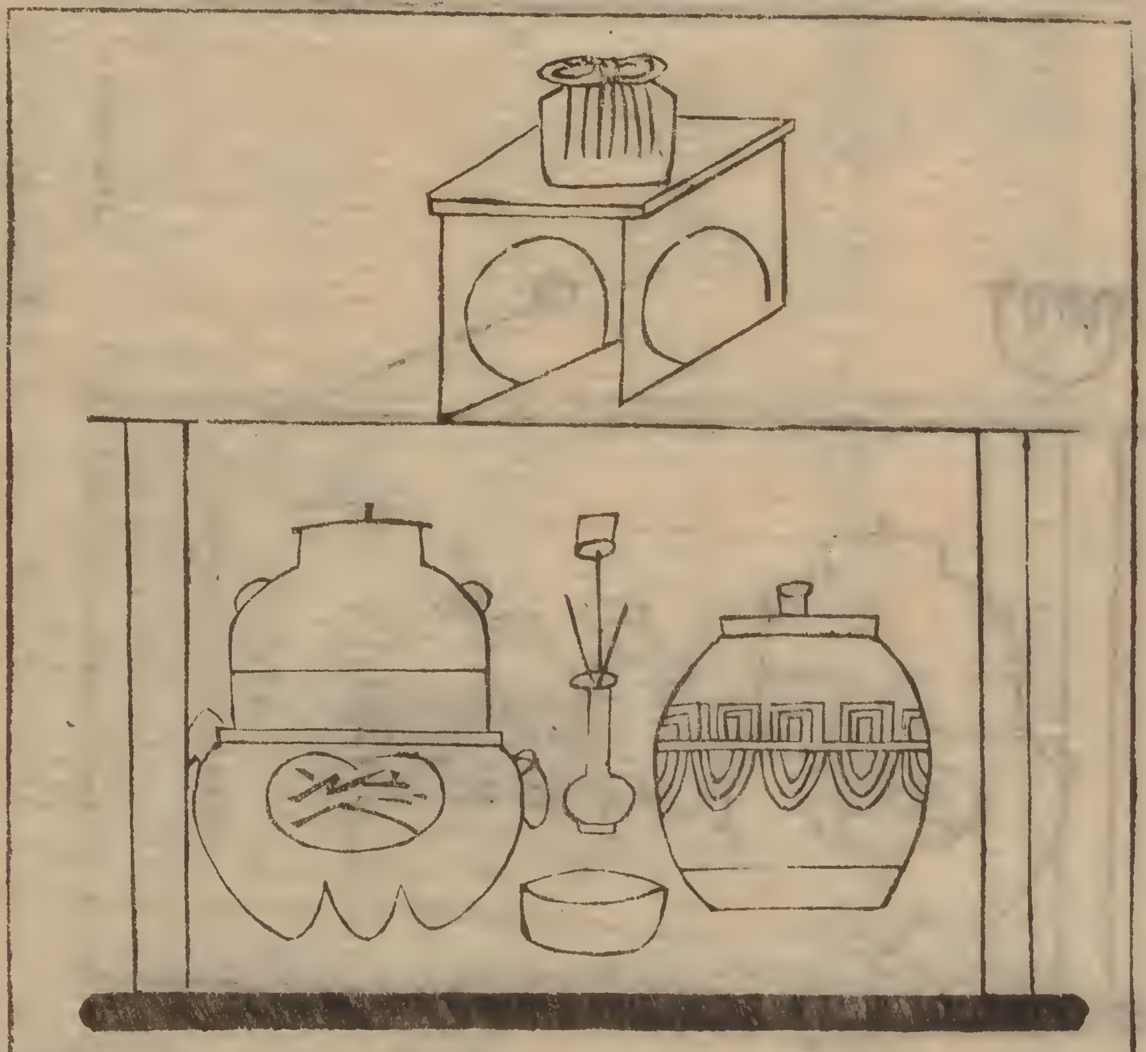
男水茶之湯之図



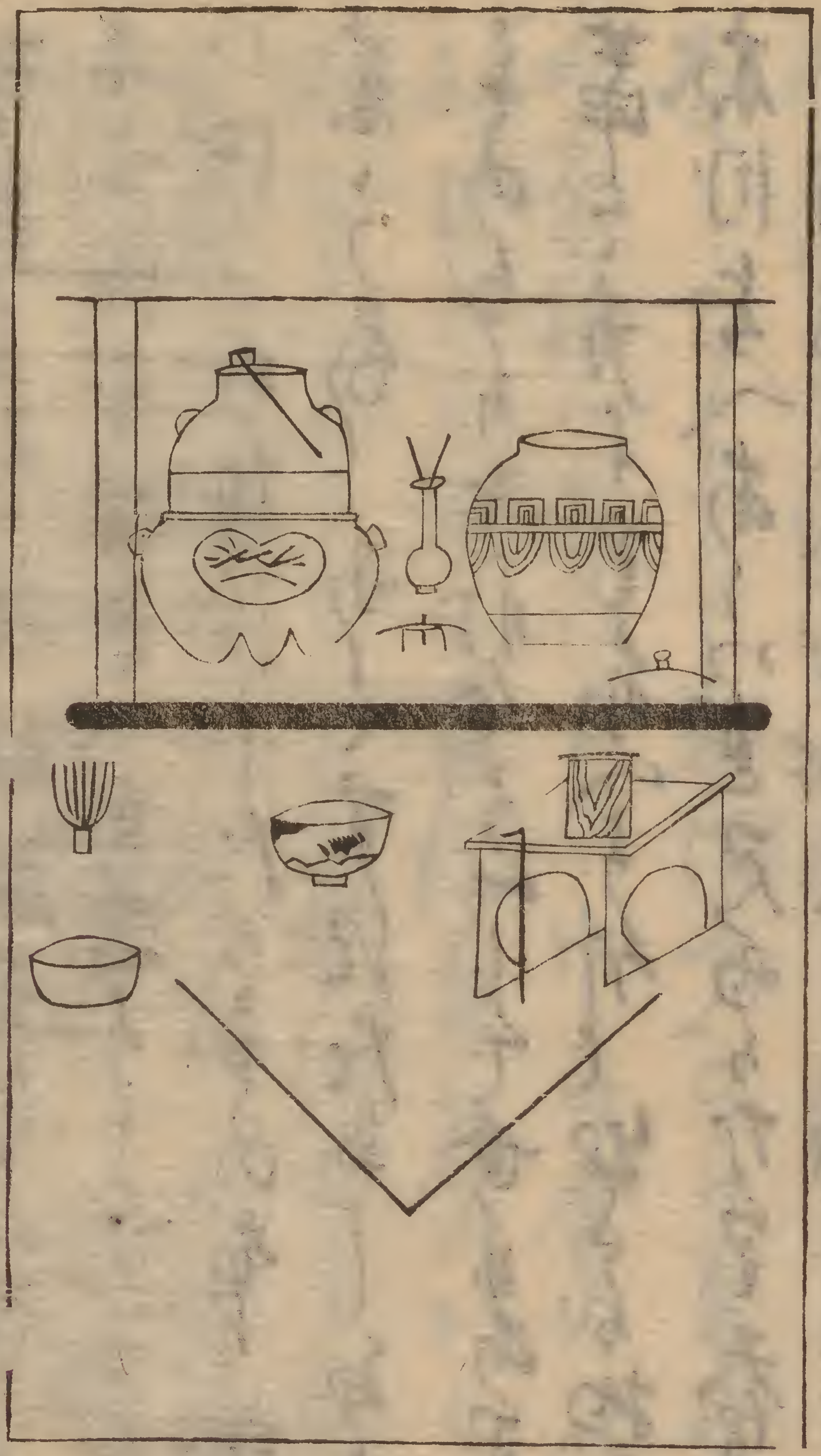
一かくのことく蓋置にして茶たつる時ハ
吉振(キツフリ)のあけ名水と名つく点法
茶の湯におゐて得をいふへき
名水といふハ所々に名水あれハ
京都にてハ宇治の三の間の水柳
乃水たゝしも尼寺(アマデラ)乃水なとを名水
にいふ点振に湯をわかしての心
ものなり
一 まあふのみをかつるゝゆるし神事のかさ
ありてあつかひそうなせし

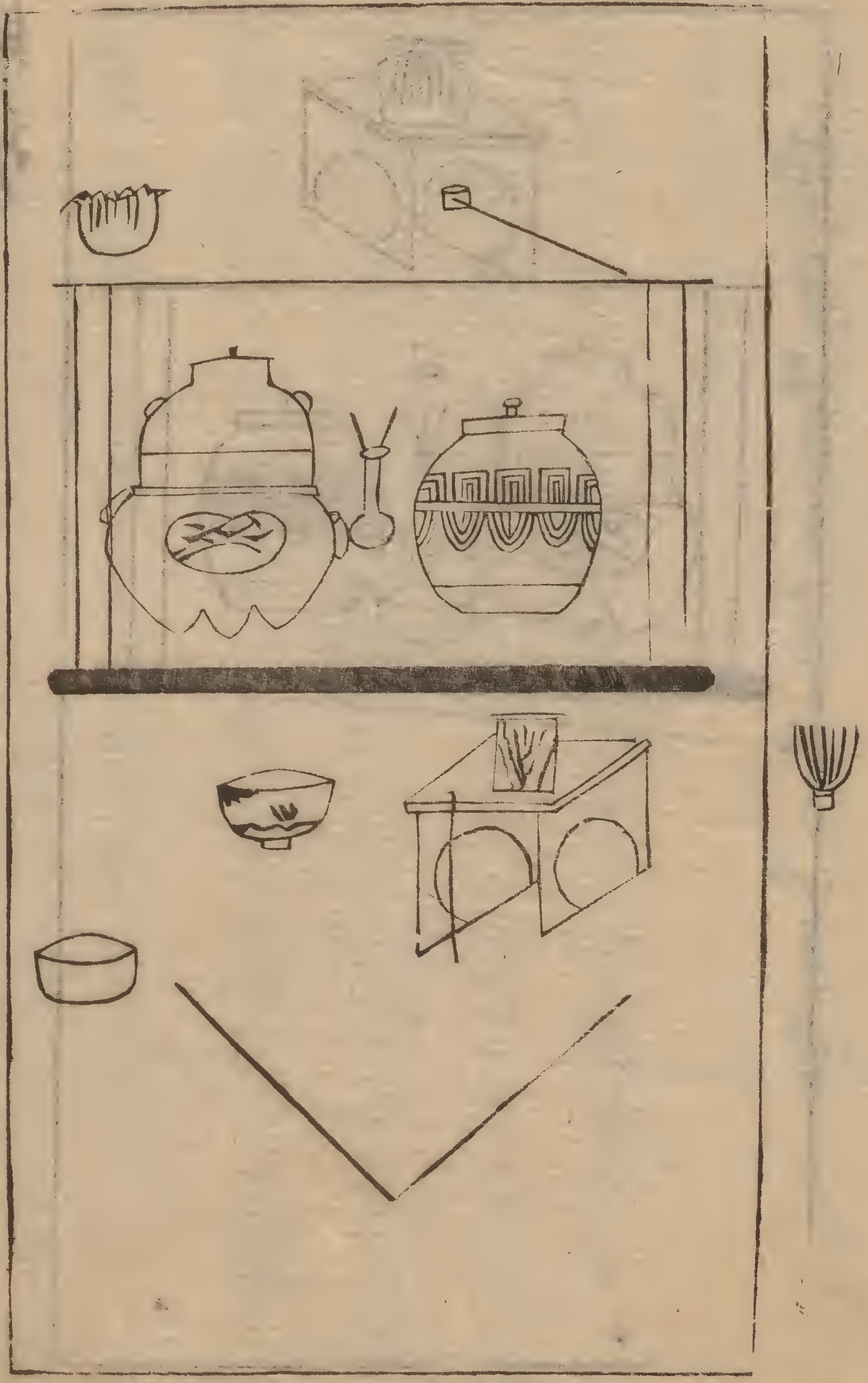


氣水乃毛のうるしハ湯をよくのむし
今も気もおりしやうつりかもなし



巾子盆に、茶金林寺茶通并茶杓組而付
常台



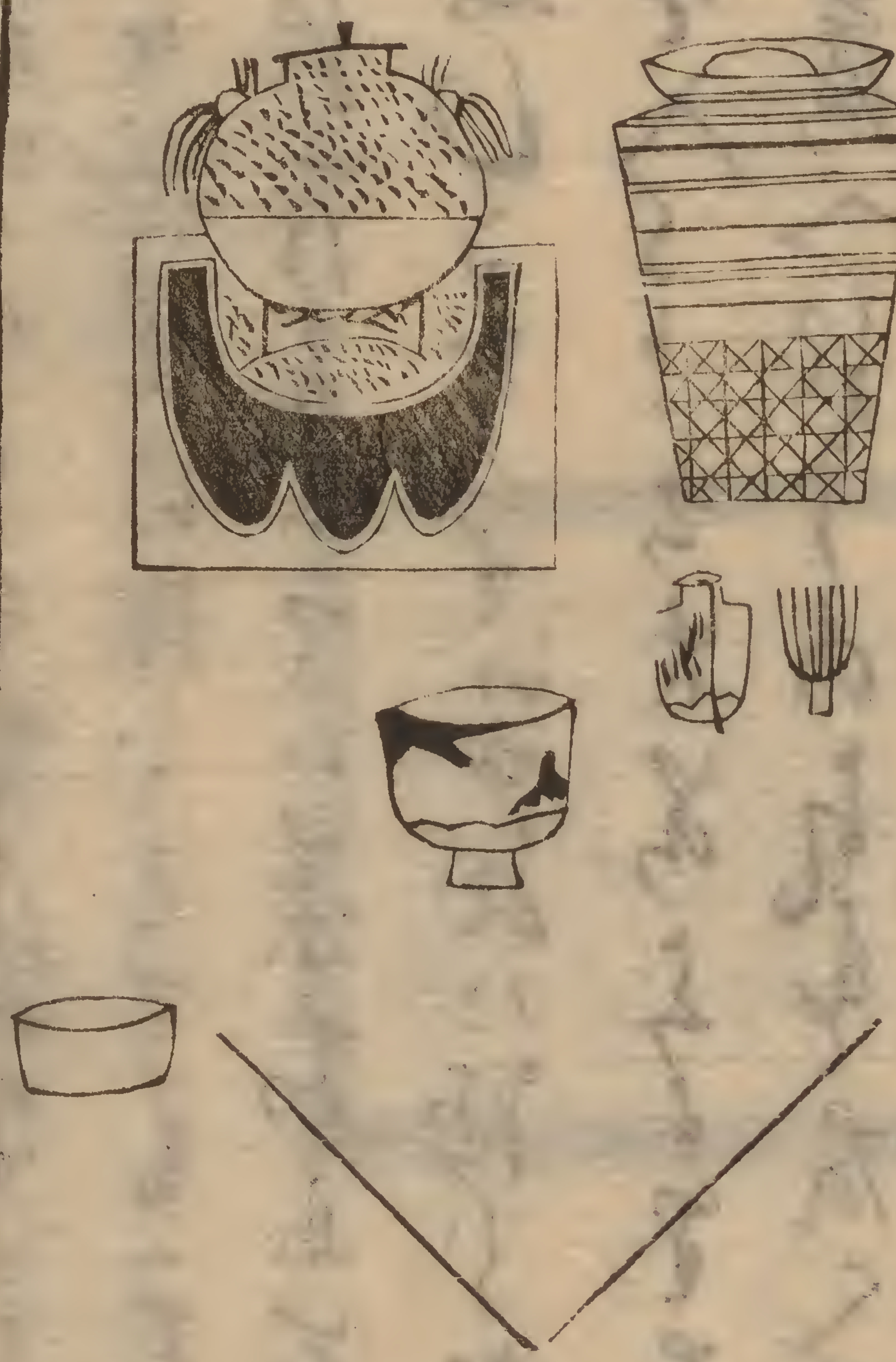


一金林手茶道といふハ頭切のうち、
吉野よりの後醍醐天皇の勅作
御茶入金林手へ、御道具しかも木
ハ茶さじの根ばしたるところの根子
頃うつしおくすしたためしある
ところありとをうつして世にありし
薑にも力よりかへよりも出ところ地へ
木目よくあつまり尺寸なる天皇
乃勅作、巾子盆ハ本作の宗か
なるその好みにて茶箋乃好みなる

盆と地のごとくにつらぬいて立ち居り此附
乃帛とを押そへの白き帛をつらね
置しこれまた勅作也へ書か茶杓
の長さ根ハ湯のごとく巾子金の端
ゑかきせ題る茶杓の盆と地の如く
にまてなりとへし茶作出と此附ハ
茶巾を捻かさなりおへる塗作
出しゃへし白帛を造つりハ今林手
茶道なされあつりて内ハ白帛にて
又勅作なるも大塔文の出作なる

何れも世に南天の根なりといふ人あ
りしも初縁に隠さの根なり
一家根あるは中に黒みすへてとこ
ことに筆ともおもへ引かる墨てしる
て見る不入物孫し見るなりけれ
口傳不文あり

茶風炉釜蓋二之図



一裏より初めより以り十五日まで余
風炉へかくる也布巾なる也然るを
冷えを極暑の時分ありても天井の
なれば座敷にてハ茶碗茶の蓋
を差しあるなり子細ハ陽に掃除
しるを入るとき其ままにてくもりて
も落へハ其の気を去くみ[illegible]の
茶湯まん端にても有る事なり
[illegible]へよ茶の蓋にてしるたるなり

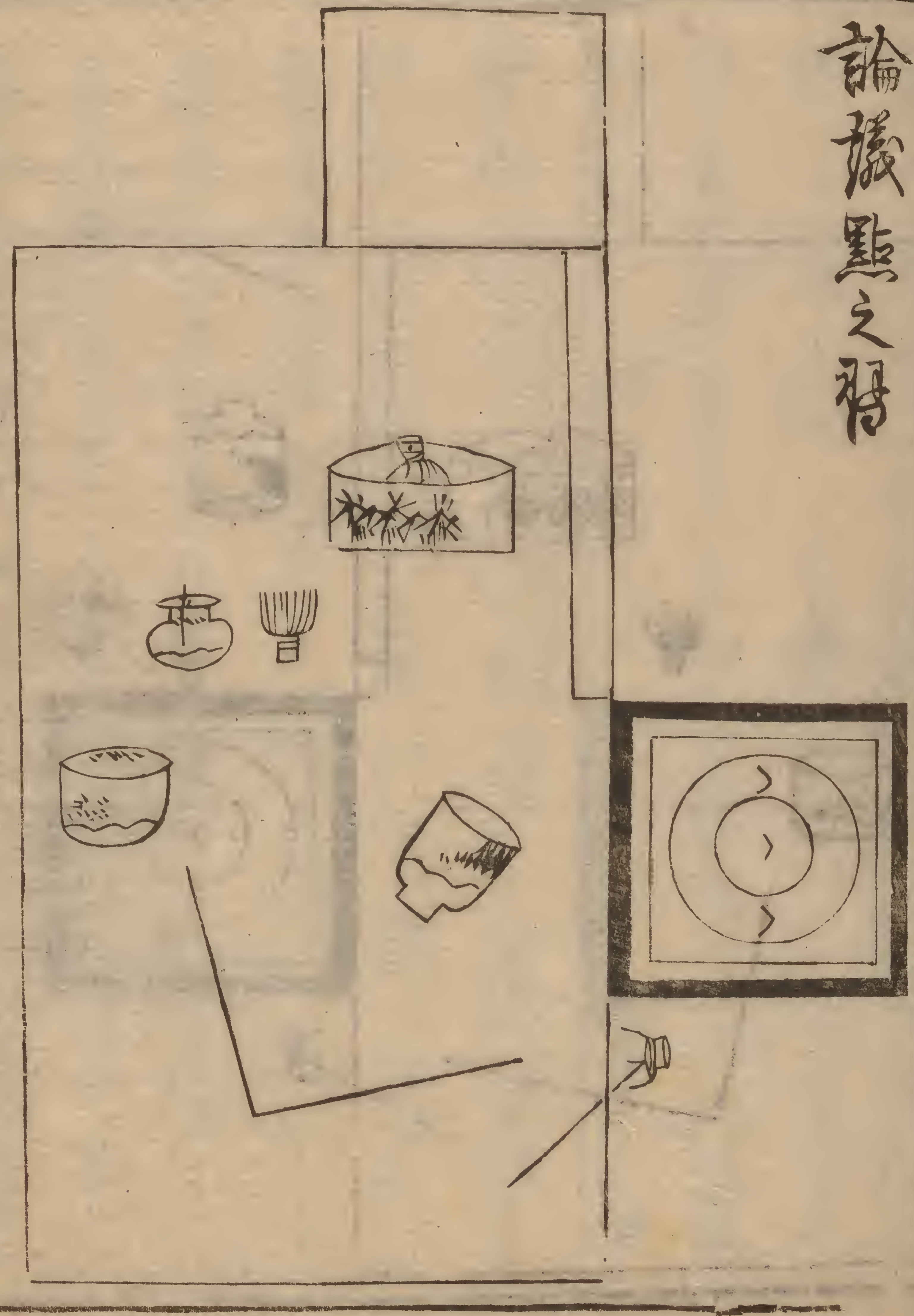
茶入湿気取之図

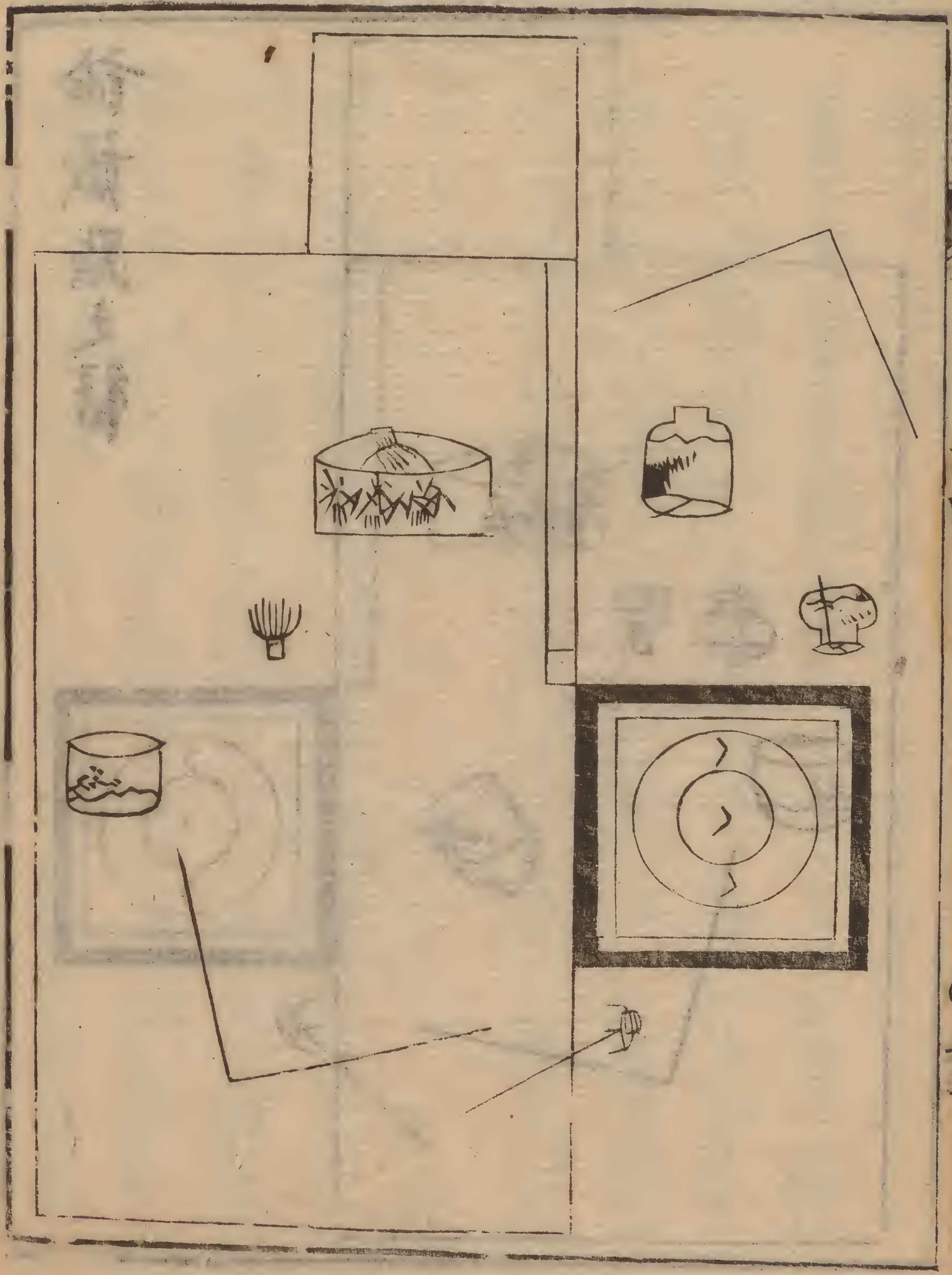
一大事の茶入にても時々紙にてふき
気をもたせ事なし蛛の巣なども底
も能く底の内の底を計す
外より入る茶入の内にふたをよく
封ずし一寸入て口を紙にてきり
うつわを隙にの口底をつくあけ
茶入の底にあくる一寸ほどよりうち
も底をうけ出したしはにて蓋を
大ふし蓋底紙しよ出をかきつけ
割口付のをせつきよく大の

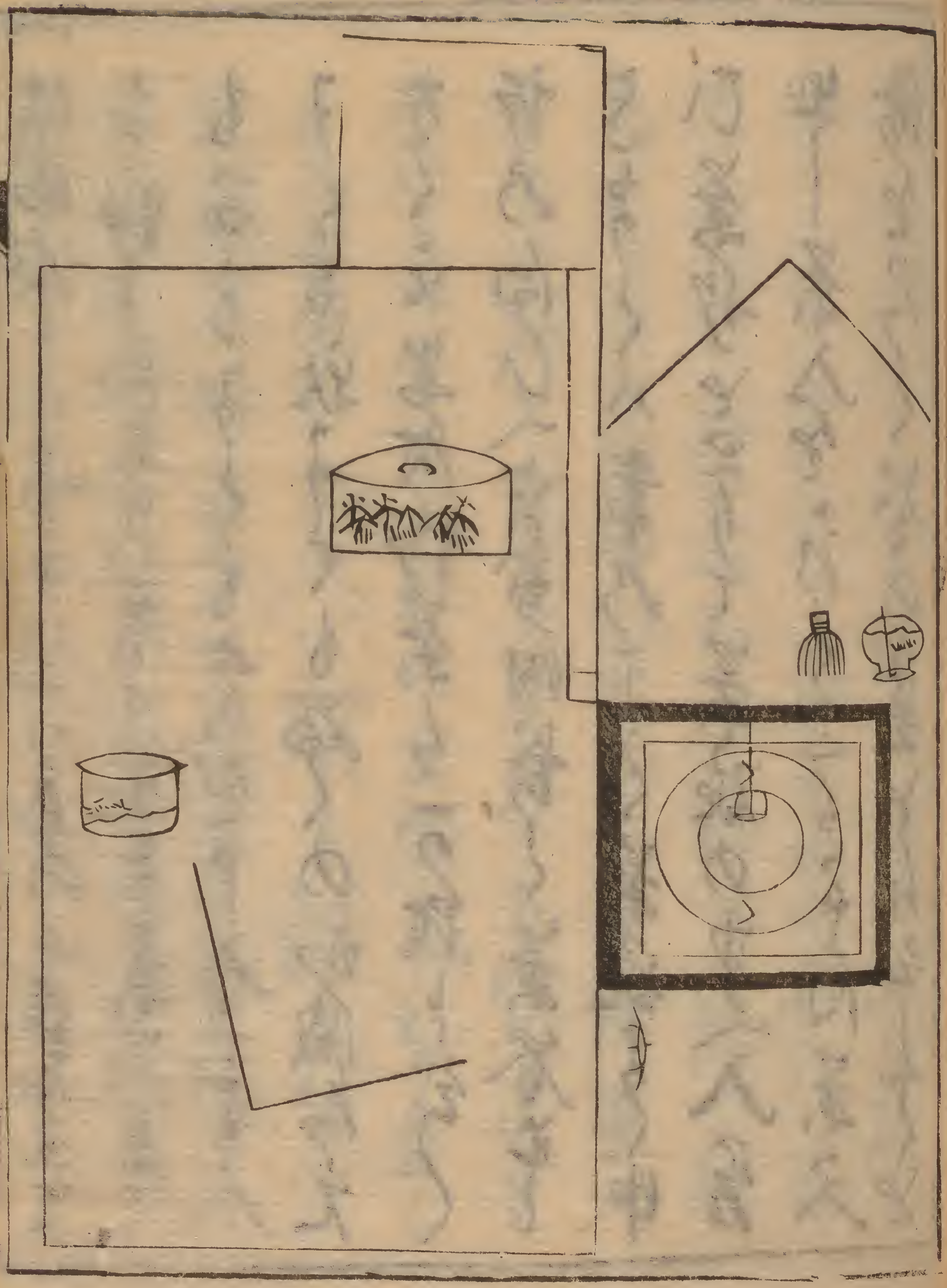
あへさる紙にのして立へ大事の中
紙にのせへし押出を手をのしきへ以外
にまへし翌日一日も三日日の茶入
をとり出しあへし其紙を油気にうつし
なるべし

一若茶入に深くろひゞきのしれすきを
そのまゝも底気そにあつとて大切に
一とらせをいへしかも茶は詰う
事もなく油よくしみしなき師
事わけのを抜ずせらるへく

論識點之習







一此帛紗といふものハ此道の第一の宝なるによつて
又四方囲ありて有ものなり茶たくにて
も手前ありくも此茶巾入て主人
よくも扱ふくも始めのかくれなく
なく此黒棗濃茶にて一つ點として
折乃向ひへ茶碗くおく茶巾をもつて
きれいにく八帛乃ごとく茶碗より中
ひ茶杓をとりて茶碗の中へ入茶
出し茶入をふくらふ二つ目茶入
湯をつぎ茶碗を湯とりなしやくと

ふた茶杓さし茶碗にて茶筅をとりて
中ふりて茶出し帛紗をひらきたたみ
さし出て濃茶出しく帰りに
茶をのミ此お入かへていれ茶入
茶碗ハ出て茶も茶杓も同じやう也
あいさつハ主人数の前成事なりまて
もむかしる人ハ帰りも細かなし
先師ら此ものおほきなるおさめし
仕官を人たちもおほきしもしてハ
御手ふしと常にわかちふられし不文

口傳に阿ゝ也

此の時いつ迄ハ何時とても茶の湯を

なんとかのしゆし宗乃何ほとか此

さとりハしも何事ほと深くや成れは成也

有る人のお茶ふ志くしものかなし

それまてあれいのちもあるへし翁かおよひ此

茶の湯しぬともお渡するのか

凡此銘ともハ濃く茶の大事なるも

諸の物おと知といふとも此ものおと

不知時ハ何事も徒らなる事なる故

先師いつまても大事と志す事

此事の心ハ茶湯大事なるを宗匠

茶の茶湯と云く茶湯を各

おほく定むると故ふ先師宗匠

流湯集と題号を記しまする三の茶

湯を定むるとなるゝなる也

宗乃あしふ有乃夕色四を寸御し

夫れて歌ハ日本乃和らぎ用しあらく
しか色てしるか袖み障りうまても
深らき心の一つハ清く情ハ新すみ
まことの嗜(スイ)晴乃情と見るめく明るうかや
俳く御殿の交正つましくなる也侘
すもきる人ふ侘ひ貴みもよし
今まて狂歌をうしと ますす心風和めして
誠の志ちる天の月よそ雨るる光月の
たし 俳(ズミ)ハ春なるまハ 萬木の種を
此み俳ひしまを師の句義の志を

滑く流しく讃乃葉なとなれいふ也
流しく若ふれそいそしうのやまその
ありしても暑(アツチ)を蹈く俗うれハ世の人
言葉みこそ思ひてかわる風を絹せを
流しみ此心をあかしてあのきもしかと
兆あるけれんをやりしけめるハ此俳也
先師先生と思ふの心をうけて高風
風流集と題せし事も又先師の
宗因うやそてきの三句の新吟を去
あらハして古の風の格をも見なして

ちあしと思ふ世人はみなまでを知は
まことなるまよく詳しく物しるへ
久しくかこれは識ありし

無湯